

11. 東方医学的診療の経験について

高橋 博樹

東銀座タカハシクリニック

【目的】

最近生活習慣病などの慢性的疾患の基盤病態として老化と慢性炎症があると考えられていて、炎症老化（Inflammaging）という概念が受け入れられている。その背景に伝統医学である中医学的な陰陽五行のバランスの崩れなどや、邪気などの環境因子の影響がある可能性も示唆されるように思われる。しかしながら、そのメカニズムを理解するには病気の原因とそれによる生理機能障害を西洋医学的にもみる必要があるように思われる。慢性疾患患者の中には治療効果が出にくい症例もあるが、標準的な西洋医学と伝統医学を併用して中医学的弁証論治やさらに必要に応じてそれ以外の補助的な診療方法も組み合わせて併用する方法は効果的な場合があり、このような方法は東方医学的な診療方法ともいえると思われる。このような対処方法を使って実際に経験した慢性疾患の治療経験を元にして、東方医学的診療の有効性について検討してみたい。

【方法】

西洋医学と、中医学や漢方薬、それ以外の診療手段として温熱療法などを組み合わせる方法の有効性が示唆される場合があるため、慢性疾患の症例に対してそのような方法を複合的に併用して診療を行って経過を観察した。

【結果】

慢性疾患を年単位で経過を観察した結果、症状や検査所見的には進行が少ない傾向が認められる症例があった。また、補助的な診療や検査でも改善が認められた症例があった。

【結語】

慢性疾患に対して、標準的な西洋医学的な診療以外に、中医学などの伝統医学的な診療やそれ以外の補助的な診療方法を組み合わせるような複合的な対処方法である東方医学的な診療手法が有効である可能性が示唆された。また、慢性疾患の病態の背景に伝統医学的な病態や、環境因子などによる影響などがある可能性が示唆された。

12. 臨床現場からのAI活用と意味設計——素人が三ヶ月で国際誌掲載へ

白石 健二郎

田無北口鍼灸院

【目的】

生成AIの進化は、開業鍼灸院から国際ジャーナルへの知見発信をも現実的なものにしつつある。本発表では、筆者がAIを活用してレターを投稿・採用された事例を紹介し、臨床知とAI出力の接続方法を検討する。あわせて、プロンプトを「意味の設計行為」として再定義する視点を提示する。

【方法】

GPT-4を活用し、意味・文脈・価値観を整理するSML-CMLモデルをプロンプトに埋め込むことで、診断や倫理的論考を構造化。プロンプトを単なる入力変数手段ではなく、判断に必要な世界観を構成する設計と捉えた。

【結果】

プロンプトに明示的な意味構造を与えることで、従来は語感や経験に依存していたAI出力が、臨床現場の知を反映した論考として昇華された。作成したレターはBMJ本体（DOI: 10.1136/bmj.q1129）、等に掲載された。他にも評価モデルの考案、論文作成サポート、AI開示ポリシーの実装や患者向け資料作成にも応用が進んでいる。

【結語】

プロンプトは出力を操作するための単なる変数ではない。「哲学的構造を埋め込んだプロンプト」は、AI出力の意味密度と実用精度を飛躍的に高める。意味モデルに基づくプロンプト設計は、個人開業鍼灸師レベルからでも国際的な知の発信を可能にする実践である。

キーワード：生成AI、哲学、プロンプト、SML-CML、国際ジャーナル

13. 運動器エコーおよびエコーガイド刺鍼の授業への導入

光野 諒亮・鈴木 聡・松岡 慶弥・浦田 繁

鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸サイエンス学科

【目的】

本学では鍼灸教育における解剖学的知識の理解を深め、臨床技術の習得支援を目的に、2019年度より超音波診断装置（以下、エコー装置）を教育に導入してきた。本報告では2025年度に実施したエコー装置を用いた授業内容の紹介と、その理解度および教育効果に関するアンケート調査結果を報告する。

【方法】

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部鍼灸サイエンス学科4年次前期科目「鍼灸臨床技術学Ⅱ」（全15回）において、4回分（各90分）をエコー装置を用いた授業に充てた。対象は4年生36名で、学生を約6名ずつ6班に分け、各班に1台のエコー装置を配置した。教員は4名体制で、うち熟練教員2名が2班ずつ、その他の教員が各1班を担当した。第2回から第4回の授業終了時に、それぞれアンケートを実施した。

【結果】

授業内容は第1回「エコー装置の原理と基本操作」、第2回「エコー装置を用いた肩部、大腿部の観察」、第3回「大腿部へのエコーガイド刺鍼」、第4回「下腿部へのエコーガイド刺鍼」を実施した。アンケートの回収人数は、第2回32名（88.9%）、第3回33名（91.7%）、第4回26名（72.2%）であった。エコー装置を用いた骨格筋や骨を確認できたかの設問では、烏口突起・烏口腕筋・結節間溝では100%、大腿直筋・中間広筋・大腿骨では96.9%、腓腹筋・ヒラメ筋・腓腹筋間では100%の学生が「確認できた」と回答した。自由記述の設問では「エコーガイド刺鍼は初めてで興味深かった」「説明がわかりやすかった」などの肯定的な意見のほか、「全体の時間が足りない」「使う機器によって性能差が大きい」などの否定的な意見もみられた。

【考察・結語】

エコー装置を用いた授業は、学生の視覚的理解を促し、解剖学的知識の深化および臨床技術の向上に寄与する可能性が示唆された。また、学生の関心を高める有効な教育ツールとしても機能し得る。

キーワード：運動器エコー、実習、鍼灸、エコーガイド、授業評価

一般口演（ポスター発表）

14. 学生のための順天堂大学東洋医学研究会の現在の活動と今後 ～深く学びながら広く学習の輪を広げるには～

石井 菜々子¹⁾・田中 優希¹⁾・志方 直人¹⁾・友岡 清秀²⁾・谷川 武²⁾

1) 順天堂大学医学部医学科

2) 順天堂大学医学部衛生学・公衆衛生学講座

「学生のための順天堂大学東洋医学研究会」は、東洋医学に関心を持つ医学生によって「最善の医療を提供する為には医療の洋の東西を問わない」をモットーに、東洋医学の学習の場として2018年に設立された部活動である。本研究会は医学生だけではなく本大学の医療系学生も積極的に受け入れており、現在は7学部、109名が所属している。

本研究会では、外部講師の方を招いた漢方と鍼灸に関する勉強会を毎月開催している他、週に1度、放課後に学生たちが集まり、東洋医学(特に中医学)の基礎理論に関する学習や模擬症例検討会などを行うセミナーを開催している。また、年に1回ゲストの先生をお招きして一般公開のシンポジウムを開催している。

さらに、学会活動にも積極的に参加しており、これまでに日本東方医学会、日本東洋医学会学術総会や日本アーユルヴェーダ学会研究総会での学会発表も行っている。

最近ではこれらの学習活動に加えて、野外での薬草ワークショップや文化祭出店などのカジュアルな活動を増やしている。部活動としての側面を生かして、学生が東洋医学に興味を持ち学び始めやすくなるよう、学習へつなげるための敷居を下げる取り組みを行っている。

15. 氣圧トライアルが肩こりに及ぼす影響 —健康成人を対象とした探索的研究

野村 勇貴¹⁾・牟田 美慧¹⁾・岩崎 真実¹⁾・友岡 清秀²⁾・谷川 武¹⁾

1) 順天堂大学大学院医学研究科 公衆衛生学講座 2) 順天堂大学医学部 衛生学・公衆衛生学講座

【目的（背景）】

肩こりは、後頭部から肩甲骨周辺にかけての筋緊張による不快感や鈍痛等の症状であり、不安等の心理社会的要因の関与が知られている。日本での有訴者率は高く、健康関連QOLや労働生産性の低下をもたらすため、公衆衛生上重要な課題である。心身統一合気道会で実践されている氣圧は、訓練を受けた施術者が身体に触れて適度な圧を加える手技である。氣圧に類似する指圧による肩こりへの有効性が示唆されているが、氣圧が肩こりに及ぼす影響は明らかにされていない。本研究では、氣圧の要素を取り入れた介入プログラムである氣圧トライアルを実施し、単群前後比較試験により肩こりや不安に及ぼす影響を探索的に検討した。

【方法】

18歳以上80歳未満の健康な成人71名を対象とし、8分/回の氣圧トライアルを週3回、4週間実施した。肩こりの評価として、Visual Analogue Scale (VAS) と僧帽筋上部の筋硬度を測定した。不安は、状態不安を評価した。測定は介入前、2週後、4週後に実施した。氣圧トライアルがVAS値、筋硬度および状態不安に与える影響をフリードマン検定または反復測定分散分析により検討した。VAS値と状態不安の変化量の関連について、スピアマンの順位相関分析を用いて検討した。

【結果】

介入前、2週後、4週後のVASの中央値は49 mm、33 mm、31 mm だった ($p<0.01$)。同様に、筋硬度の平均値は0.929 N、0.935 N、0.907 Nだった ($p=0.048$)。状態不安の中央値は38点、37点、34点だった ($p<0.01$)。VAS値と状態不安の変化量の間に有意な正の相関を認めた ($\rho=0.326$, $p<0.01$)。

【結論】

氣圧トライアルが、不安の軽減を介して肩こりを改善する可能性が示された。今後、無作為化比較試験による、その肩こりへの影響や作用機序の解明が求められる。

キーワード：肩こり、不安、氣圧トライアル、探索的研究